

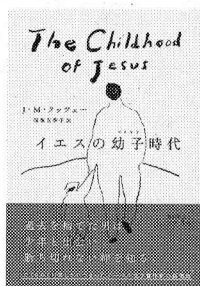
万能包丁の切れ味

おさなご

J・M・クツエー『イエスの幼子時代』

鴻巣友季子訳

阿部公彦



早川書房刊
本体2300円

なるほど、クツエーの話術にはまる
とはこういうことなのだ。ストーリーそ
のものはかなり強引。どこだかよくわか
らない土地の移民局のような場所にたど
り着いた主人公のシモンと少年ダビ
ド。この二人、詳細な過去はわからない
が、ともかく親子ではないらしい。男は
何とか少年の母親を探してやろうと必死
である。そして港湾労働で生計を立てな
がら少年を養うある日、たまたまテニス
コートで見つけた女性イネスを「この人
が母親だ」と直感的に判断、ダビドの
母となってくれるよう頼みこむ。女性
はじめは戸惑うものの結局少年を引き取
り、やがて実母以上の溺愛ぶりを示すよ
うになる。対して、シモンの方は自分か
ら少年を差し出してにおいて、イネスの育
て方が何だか気に入らない……。

は？ と思う人もいるだろう。どうし

てシモンが少年の母親を探すの？ どう
して偶然会った女性に彼を引き渡すの？
この動機の薄弱さと因果関係のテキト
ーさは何？ そもそもここはどこ？ 彼ら
は誰？……しかし、実際に小説の語りに
耳を傾けていると、違和感などまったく
感じないから不思議だ。むしろすぎなく
精妙に織りこまれたテクストを、もぐも
ぐ噛みしめながら読んでいく気分になる
くらい、語りのステツプの一つ一つに充
実感がある。

クツエーの文章には、どこか無国籍
風の虚無感と欠乏感と、だからこそその身
軽さ、スピード、ウィット、それからつ
るつと滑らかで開放的でついに中に入って
いきなくなるような誘惑性、さらには微
かな温みまで共存している。読みやすい
だけではない。その素朴さは究極の洗練
を体現する。今の世界において、小説が

書かれるとしたら、これしかない！ と
決めつけたくなるほどの万能包丁のよう
な文体なのだ。そして、そんな風につり
こまれるうちに、はつとするような難問
に出くわすというのも、いつものクツ
エーの手法。実の親とは何か？ 母と
は？ 父とは？ 現実とは？ 論理と
は？ カフカ風の「門前」の場面を冒頭
に据えた作品は、終始私たちに門のよう
な形をした問いを差し出し続ける。

クツエーの無国籍感、外国語を翻
訳したような奇妙に淡泊で等身大で日常
的な、それでいてキレのある英語から来
る。実際、設定としては「スペイン語か
ら翻訳された英語テクスト」とのこと。
これをさらに日本語にするのだから翻訳
者はすごい。クツエー翻訳の第一人者
として知られる鴻巣友季子氏の技を是非
堪能してほしい。